

景観フォーラム 8号

日本景観フォーラム会報 8号 (2013年1月1日)

<巻頭言>

明けましておめでとうございます。

当会報も2回目のお正月を迎えることが出来ました。景観についての話題はそんなに大きく変化していませんが、東京駅復元工事の完成とともに古き良き建築物に対する評価が若干高まってきた感がいたします。高齢化社会の賜物かもしれませんが、過去を振り返ることにより静かな時間を楽しもうという人々が増えているのでしょうか。

しかし、景観は単一の建造物のみを論じるだけでは見当違いでしょう。景観はそこに生きる人々の息遣いの現れであり、それが一つの集合として目の前に現れるということであり、散発的に古き良き建物のみを、まちのあちこちに温存するだけでは、当然景観は成り立つはずありません。

さて、高齢化社会を単に否定的に捉えるのではなく、高齢者の肥えた目線で“本来の豊かさとは何か”と景観に問いかけてみるのはいかがでしょうか。そのことにより、日本社会も今まで経験したこともない“本来の豊かさ”を発見できるかもしれません。当フォーラムではその一助として、老若男女が一緒に実施することで最大効果が上がる「景観まちあるき」プロジェクトを発進いたします。ご参加ください。

(斉藤全彦)



<2013年予定>

セミナー

- ・ 2月19日(火)18:30～電線のないまちづくり
- ・ 2月27日(水)18:30～真鶴町役場の方
- ・ 4月26日(金)18:30～路面電車と景観
- ・ 5月24日(金)19:00～鎌倉市役所の方
(19日は大和ハウス(株)東京支社、それ以外はJICA 研究所)

景観まちあるき

- ・ 3月22日(金)～23日(土)真鶴町まちあるき
- ・ 4月上旬 まちあるき報告会 (JICA 研究所)
- ・ 5月24日(金)18:30～まちあるき発表会
- ・ 6月15日(土)鎌倉市まちあるき



特定非営利活動法人 日本景観フォーラム

〒150-0031 東京都渋谷区桜丘町 14-5-502

TEL 03-3780-3814

FAX 03-6379-6681

E-mail info@keikan-forum.com

URL : <http://keikan-forum.com/>

ナショナル・トラストと景観 —生き物のいる自然景観を守る—

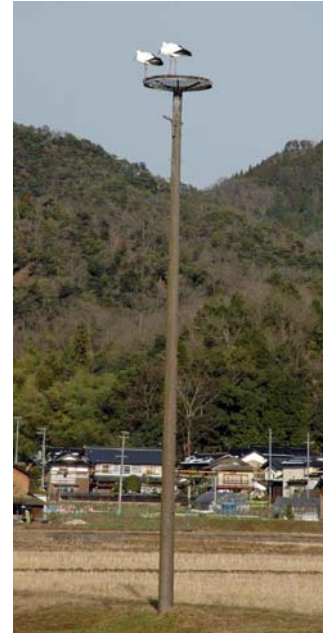
(公社) 日本ナショナル・トラスト協会
中安 直子

日本では四季折々の美しい自然景観を各所で見ることができますが、それらが将来的に守られるかどうかは、国立公園の特別保護地区等の保護区に指定されているかどうか、あるいは公有地かどうかで違ってきます。日本に残っている原始的な森や湿地など本来の自然は国土の約20%ですが、保護区で守られているのはその4分の1しかありません。

類まれな自然景観であっても、すべて保護区で守られているとは限りません。国立公園の中にも私有地はたくさんあり、乱開発のおそれがあります。最近では、外国資本による水源林の買収や、相続などをきっかけとした山林や原野の開発という新しい課題も出てきており、行政による保護区や公有地の拡大を願いつつも、市民や企業の力で自然地や水源地を買い取ってトラスト地(民間の保護区)を増やす活動への期待が高まっています。

私たちの協会はナショナル・トラストの全国組織として、日本全体を視野に入れて活動しています。現在、絶滅の危機にある日本の生き物に焦点をあてた「いきものトラスト」に力を入れているところです。トキやコウノトリなど、一度絶滅してしまった生き物を復活させる取り組みが佐渡や豊岡で始まっていますが、この「いきものトラスト」は生き物の生息地を守ることで、その絶滅を未然に防ごうという取り組みです。

今年の重点プロジェクトは、世界自然遺産の登録が予定されている奄美大島で国内有数の豊かな森を守るアマミノクロウサギ・トラストです。世界でも奄美諸島にしか生息していない絶滅危惧種のアマミノクロウサギ

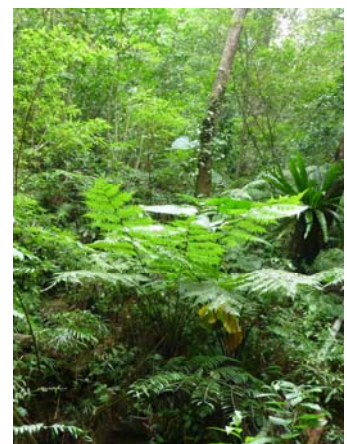


やルリカケスなど、多くの生き物がすむ瀬戸内町内の森 100ha を買い取るキャンペーンを2月より開始します。100ha という 1km×1km 相当のかなり広い面積です。奄美の青い海や集落と一体となって、美しい自然景観を構成する森として守っていききたいと思います。

今回のキャンペーンは、一筆ごとに支援者を募る「一筆オーナーコース」を設けているのが特徴です。登記上のオーナーになるわけではありませんが、自分が寄付したお金が具体的に「この部分の買い取り資金になっている」ことを感じることが

できます。任意の金額を寄付していただく「みんなの森コース」と併せて、目標金額の2000万円を達成する予定です。

何かの生き物が絶滅の危機にあるということは、その地域の生態系のバランスが崩れているサインです。生き物を指標にトラスト地を増やすことで、その土地に生えている草や樹木、多くの野生生物、おいしい空気や水などの生態系を丸ごとセットで守ることができ、自然景観の保全につながります。国内には絶滅の危機にある生き物がたくさんいますので、「いきものトラスト」シリーズで生き物のいる自然景観を残していく取り組みを、今後も続けていきたいと思っています。



※アマミノクロウサギ・トラスト・キャンペーンの詳細は、協会のHPで発信していきます。<http://www.ntrust.or.jp/>

VOICE

● 「景観の原点」 ……………清野 和樹

なぜこのような景色なのか、なぜこの街はこんな地形なのか、景観の原点は常に何故と問い続け、その答えを知ろうとする食欲さであると思う。何故なら、景観は長い年月を経て創り出されるが、それらすべてに何らかの意味を有しているからだ。

景観と歴史、文化は相関関係にある。しかし、日本人の多くは自分の郷土の歴史を知らない場合が多い。そもそも現代教育では郷土史が教育カリキュラムの中に含まれていないのだ。すなわち、自分で疑問を持ち、食欲さがなければその地域の歴史などを知る術はない。学校で教えられているのは、文科省によって全国一律に決定されたマニュアル通りの教育なのである。そこから地域愛なんて生まれる訳がない。だから、ルイス・ハーバーが言うように「現代の大都市の住民は、史上例のないほど互いに無関心となり、社会的にも精神的にも孤立」するような現象が生まれ、結果、利己主義中心の街になってしまうのである。

しかしながら郷土史を知る術はある。現在の地図と昔の地図を比較すること、歴史書を読む事である。これらは図書館に行けばどこでも資料が残っているはずである。過去と現在を比較することでこの街は元々田圃だったのだとか、貯水池だったのだとか、知り得ることが多い。そして、どのような過程を経て現在の景観が形成されたかがわかるのだ。また、私の実体験であるが、幼少時の町内会などの地域コミュニティによる行事や書籍から郷土文化や郷土史を学び、地元を離れた事から故郷の良さ、すなわち地元愛を初めて実感するのだ。

日常のさりげない景観を看過するのではなく、一度立ち止まって考える心の余裕が必要かもしれない。

L F J ブックレビュー 28 ……………『文化的景観—生活となりわいの物語』

金田章裕著 日本経済新聞出版社 2012年

文化を定義することは大変難しい。ラテン語に由来する名詞 *cultura*, *cultus* は耕作、耕地、世話、生活習慣、贅沢、衣服、装飾、保護、尊敬、祭祀等を意味し、手入れをする、移住する、敬慕する、祭るなどが動詞 *colo* に由来し、農耕の言葉から魂の耕作として教養・教化が生まれたという。また翻訳語としての“文化”とは、何もないものから価値ある状態にすることであり、因みに“文明”は武ではなく“文”をもって世を“明”るくすることであるという。

著者の文化的景観の定義は「文化的景観は、景観のうち特にその地域の環境に対応しつつ、歴史を通じてかたちづくられたものであり、文化そのものの一部である。文化的景観はしたがって、その地域における人々の生活と生業を物語っている」とする。即ち、この書によって著者は自然と人間の営みによって生まれた価値をどのように継承・発展させていくかを問いかけている。

第1部は文化的景観とは何か、という問題を日本の世界遺産である合掌造り集落を見ながら考えてゆく。次に、地域遺産としての文化的景観として、景観法制定以降の日本の文化財と文化的景観の推移を探究する。そして、地域の構造変化と文化的景観との関わりを日本社会の景観を最も揺るがしている“近代化”について論じている。

第2部は日本全国に広がる文化的景観を京北の北山杉のような山村・山間の観点から、奈良の奥飛鳥のような農村の場から、琵琶湖北西岸の水辺空間から、そして、都市としての文化的景観を宇治と金沢を見ながら明らかにする。

そのように発見した文化的景観をどのように保護・保全、そして発展させていくかという問いかけに対し、第3部において文化的景観のマネジメントとして英国の文化的景観を論じる。大学都市ケンブリッジ、18世紀の農村景観コッツウォルズがどのようにして今あるのか。最後に著者は、今生きている景観、変化している景観に対してどのように対処するかの問題に対して、先ず、日本において“景観”という概念をどのように捉えてきたかを概観し、次に、生きたシステムとしての景観を京都、沖縄県竹富島、そしてメルボルンの都市景観がどのように現代の文化的景観として今生きているかを考察している。

人類の歴史は“文化”と“文明”の関わり合いで本来の豊かさを追求してきたと言える。もう一度、豊かな“文化と景観”を考える時ではないだろうか。(斉藤全彦)

TAKO TAKO あがれ

都市景観の内と外～レトロな喫茶店から考えたこと……………豊村 泰彦

景観には都市景観や自然景観があるが、建物の中や敷地の中は普通「景観」とは言わない。しかし、景観は人間が知覚に基づく観念であることを考えると、建物の外だけが景観というのは合点がいかない。建物や敷地の内か外かにしても厳密にはその境界が曖昧な構造もあるし、建物内が外の景観とはまったく切り離されたものということは歴史的にも他国の例からも考えられない。つまり、都市景観については、建物の敷地内や室内を含めた全体を景観と捉えるべきだと思う。もちろんその場合、対象となる建物が、公共性のある空間であることは異論のないところだろう。

景観は実に幅広い

堅い前置きはここまで。要するに、いい景観、悪い景観は個人にとっては大部分が主観の問題ということだ。偉そうなことを言っても、人はみんな快適な環境や場所に行ったり住んだりしたいわけで、自分が直接関わる景観は、形状や色彩、臭気も空気も自分の許容範囲内でないと不快な気持ちになる。やはり、人は居心地がよく、目を楽しませてくれる空間の中に身を置きたいのだ。

考えてみるに景観の尺度というのは実に幅広い。例えば、石と金属で幾何学的に構成された無機質な公共施設について良い景観か悪い景観かしばしば議論の対象となることがある。ポストモダニズムの一部の建築家たちは、口角泡を飛ばしてこうした建築群を文化だ芸術だ環境に優しいと宣伝する。一方では、狭い路地に雑多な灯りや看板、幟旗で溢れ、焼鳥屋の煙が靄となって漂い、人間の本能が渦巻く猥雑空間。そこには人だけでなく、雀や鴉、猫や鼯、裏では無数の鼠が残飯処理に精を出しているようなまことに有機的な場所もある。それも完璧な景観である。このような様々な景観を考えると、都市の外面だけを見て論じることがいかに無意味であるかがわかる。

カフェの話

最近、カフェが大いに繁栄している。これからカフェの黄金時代を迎えるかも知れない。カフェは昭和から平成にかけては「喫茶店」「純喫茶」が主流だった。しかし、今では、コーヒー、紅茶などを提供する談話空間から、多様な軽食メニュー、おやつ、酒類まで揃えた新しい商業の参入者として拡大し、今やコンビニと並んで必須の施設となっている。若い人が1日1回は入る。爺さん婆さんも入る。それに対して、今までは主流だった「純喫茶」では閑古鳥が鳴き、多くの店が廃業に追い込まれている。その一方で、老舗の喫茶店のレトロな店構えや内装は地域の景観として、親しまれ、看板がなくなることを惜しむ人も日増しにしに増えている。安心してください喫茶店はまだ頑張って生き延びています。もちろん、昼間だけでは採算がとれないので、夜は「バー」タイムとしてお酒を出し、簡単なおつまみも出すように、イノベーションしたところは今でも健在である。なんたって、昭和の香りがするレトロな空間は年寄りにはたまらない。でも最近では若い人も来るようになり、年齢を超えた交流も芽生えている。それは昔ながらの喫茶店が街の雰囲気、景観に大きな意味をもつことにほかならない。中でも、その一事例となるのが今もますます人気が高く、連日満席状態が続く東京・神保町の「さぼうる」である。

喫茶「さぼうる」

「さぼうる」は、地下鉄神保町駅の出口のすぐ近くにあり、店の置くが半地下と中2階になっている。創業は昭和30年で、柱や杉のテーブルは創業当時のものだそうだ。また、煉瓦のしきりや壁に落書きが入っていて、見事なアートな空間である。居酒屋よりもこの店の方が落ち着く。「さぼうる」の詳しい紹介は紙面の都合でまたの機会とするが、この店は外観も内装もメニューもBGMも客の趣向もすべて街の景観神保町という街の「景観」として溶け込んでいる。つまり、都市景観においては建造物となるものはすべて内と外は独立したものではなく、双方が複雑にっそして密接につながり都市を形成すると考えるべきだと思う。さらに景観は人の目を通して、人間の心理にもつながり常に交信している。もっと言うと、無意識の世界にもつながっているのだろう。都市景観を考える際にはマインド・サイエンスの視点も欠かせないのではあるまいか。